

## TAT 分析・解釈マニュアル

### はじめに

ここでは、「標準比較法」(Henry (1956) を基にして、安香宏や坪内順子が開発・発展させてきた方法に対して、筆者がその分析・解釈法の特徴から「標準比較法」と名付けたものである)による TAT 物語の分析・解釈法を示す。標準比較法では、TAT 図版を見て、多くの人は同じように絵を見、同じように感じ、同じような物語の筋を作ると考える。そして、多くの人と違う見方、違う感じ方、違う物語を作った場合に、それをその人の特徴とみなす。被検者は、他の人と同じように絵を見ているのか(=反応領域の評価)、他の人と同じように感じ、同じように物語を作っているのか(=着眼点の評価)と言う視点から、TAT 物語の分析を行う。

具体的には、

- ① 反応領域の認知・省略・歪曲(定義は、以下に述べてある)の有無を見る。
  - ② 着眼点を参考にして、物語の内容を検討する。
- という2段階のプロセスを経ることになる。

なお、分析・解釈に当たっては、以下に示す「TAT 物語生成のプロセスの仮説モデル」を念頭に置くと分かりやすい。

### 1 TAT 物語生成のプロセスの仮説モデル

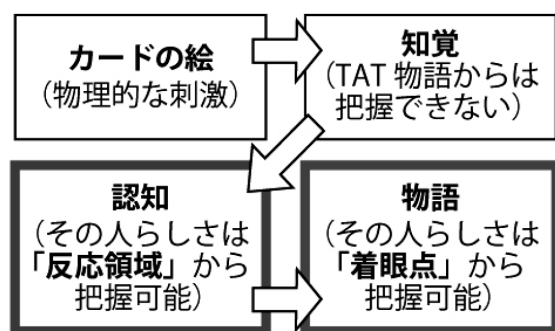


図1. TAT 物語生成のプロセスの仮説モデル  
分析の対象とするのは、後ろの2つである。

### 2 反応領域及びその評価方法

(1) 反応領域 反応領域とは、TAT 物語の中で被検者が言及した絵の部分のことである。Henry (1956) が Manifest Stimulus Demand of the card としての初めて取り上げ、安香・坪内 (1968) が反応領域としてまとめたものである。両者には若干の相違があるが、本研究では、安香 (1990) に従い、Henry の反応領域を示した。TAT 図版には、図版ごとに、その出現率に基づいて D, d, 及び Dd という3種類の反応領域が設定されている。この区別は、臨床経験から Henry が設定したものであるが、

実際のデータに基づく、図版ごとの反応領域及びその出現率については、付表を参照されたい。

#### (2) 反応領域 (D, d, 及び Dd) の定義

D: その絵を適切に認知したことの反映であるような、換言すれば、普通の被検者が物語を作るときにたいていは着目し使用する絵の中の主要な部分。日本の大学生に関して実際の出現率をみた川越・安香・藤田 (2001) や本村・遊間 (2008) では、全体の70%以上の者が物語で言語化している場合に D としている。

d: 物語を作る際の筋はこびに欠かせない D のような部分ではないが、普通の被検者がよく注目し物語中に取り入れる絵の部分。全体の70%未満20%以上の者が認知している場合を d としている。

Dd: 一般的にはめったに注目されないが、ある人びとによってたまに注目され物語中に取り入れられる絵の部分で、被検者のなんらかの「とらわれ」ないしは細部固執の指標。先行研究では、出現率が20%未満の場合 Dd としているが、解釈上特に意味があるのは、ロールシャッハ検査の O 反応 (出現率1%未満) に近い場合である。

(3) 認知・省略・歪曲 反応領域に対して、その領域が認知されているか、省略されているか、あるいは歪曲されているかを評価することで、被検者が作った TAT 物語の認知的な側面が分かる。定義は以下の通りである。

#### (4) 認知・省略・歪曲の定義

認知: 物語の中で、D, d, Dd について、言及すること (見ていそうだが、言語化されていないものは認知とはしない)。

省略: 認知していないこと。

歪曲: D, d 及び Dd の一部について、通常的な認知 (意味づけ) とは明らかに違った認知をすること。つまり、変なものを見ていること。例: #1 のバイオリンを船とする

### 3 「着眼点」と「通常的な筋」

TAT 図版は、各図版によって、図版に描かれた絵が、我々にどのような感情や欲求を呼び起こすかが異なっている。これを図版の「潜在的刺激特質」と呼ぶ。この「潜在的刺激特質」によって「通常的な筋」が決まる。この分析・解釈マニュアルでは、分析に直接役立つように、各図版の「潜在的刺激特質」がどのように物語に反映されるかという視点から整理して「着眼点」として示した。これらを検討することで、TAT 物語の内容に見られる、その人らしさの分析を行う。この場合、D や通常的な筋から、ずれた物語の明細化を把握することが、大きな手掛かりとなることが多い。

## 分析・解釈の手順

1 具体的な物語の分析を行う前に、図版ごとの絵の内容に基づく「着眼点」を把握する。

2 「絵をどのように見たか」について、反応領域への言及の有無等（認知・省略・歪曲）によって、検討する。分析は次の順番に行う。

(1) 全てのDをTAT反応に取り入れて物語を作っているか（言及しているか）？

if Yes → その図版の「着眼点」に関する心理的な領域については、一般的な反応（ごく普通の人と同じ、平均的な反応）ができる人である。

if No → その図版の「着眼点」に関する心理的な領域については、「何らかの心理なこだわりや特異な傾向」を有している人である。

Dに言及しなかった場合の「何らかの心理なこだわりや特異な傾向」をとらえるには、次の図2を念頭に置くと、理解しやすい。つまり、被検者が通常みるべきものを見られないのはなぜかを、「感じられない（能力がない）」、「感じることを抑圧している（無意識的に抑えている）」、「感じていることを（意識的に）隠している」を頂点とする三角形のどこかに位置付けて考えるのである。どの場合も、どこかの頂点に属すると言うことはなく、いずれの要素も持っている。

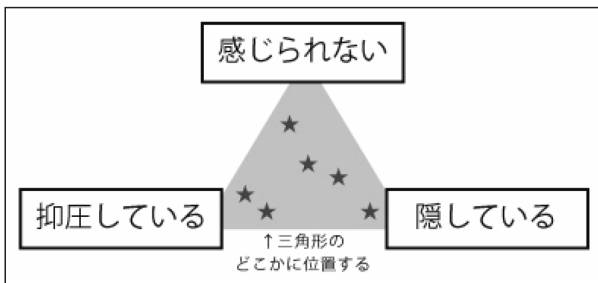


図2. 「言及なし」の三角形

なお、Dの解釈では、その出現率によって、解釈の強弱をつけることが必要である。つまり、出現率が100%のDが物語に取り込まれていない場合と、出現率が70%のDが取り込まれていない場合では、当然のことながら、前者のほうが、被検者の特異性は著しいことになる。（出現率については、付表を参照）

(2) Ddを見ているか？

if Yes → 特異な反応である。意味付けは、Ddによって、それぞれ異なる。これについては、細くなるので、ここでは触れない。初心者は、Ddによる解釈はできなくてもよい。

3 TAT物語の内容を「着眼点」を参考にして、被験者

が絵の「潜在的刺激特質」を、うまく処理できているか（物語に作れているか）について検討する。多くの場合は、潜在的刺激特質に伝えられていなければ、「通常の筋」からも逸脱していることになる。実は、反応領域で特徴がある（つまり、Dがない、Ddがある）場合には、多くの場合潜在的刺激特質に伝えていない。

if 絵の「潜在的刺激特質」に伝えている→その図版の「着眼点」に関する心理的な領域については、一般的な反応ができる人である。

if 絵の「潜在的刺激特質」に伝えていない→その図版の「着眼点」に関する心理的な領域については、何らかのこだわりや特異な傾向を有している人である。意味付けは、逸脱している程度や内容によって異なる。

図版によっては、「着眼点」ごとに解釈仮説が設定されているものもあるので、これも参考にする。

4 繰り返し現れるテーマがないか検討する。繰り返し現れるテーマは、被検者の人格特徴もしくは問題として重要な意味を持つ。Stein (1955) は、被検者固有と思われる特徴がプロトコル全体で少なくとも2回出現することが必要と述べている。

(例) 「強く支配的な母親のイメージ」とか、「異性に対する否定的な感情」という主題が何度も現れてくる場合は、被検者が、こうした傾向や問題を持っている可能性は相当に高い。

例外も、もちろんある。たった1回でも、解釈に大きく影響する場合である。例えば、たくさんの物語を作っていく間に、防衛が維持できなくなり、ある1箇所で問題が露呈してしまうなどが考えられる。

(例) #13G「これは成功の階段を登っている」

(成功という抽象的な概念と、階段を上るという具体的な行動が、特別の場面設定がないまま混在している。)

→ Weisskopf (1950) の逸脱指標の Symbolism (象徴) に該当する。

5 これまでの臨床経験を基に、これまでのステップでは取り上げられないが、しかし重要であると感じる部分を抜き出し、解釈する。特に、物語の明細化に注意すること。

6 反応したときの自分の感情を思い出す

それぞれの反応をした時の自分の感情を内省的に振り返ってみることで、分析・解釈は深まる。絵を見て自分はどういうイメージを抱いたのか、いろいろ連想してみるとよい。

## 分析・解釈についてのまとめ

### 1 特徴の解釈上の重み付け

プロトコルの特徴の抽出，その解釈に当たっては，重み付けを次のように考える。

- (1) 反応領域に特徴がある場合は，解釈は，着眼点（潜在的刺激特質）を基に考える。意味付けの強さは，付表にある本村・遊間（2008）の出現率を参考にする。先にも述べたように，出現率100%のDを見ない場合と，70%のDを見ない場合では，当然，その重み付け，もしかすると解釈も異なる。
- (2) 文献や先行研究により解釈仮説が示されている場合には，これを用いる。
- (3) 自分の臨床経験から，プロトコルの特徴を抽出し解釈する。ただし，その論理を明確にした上で，自分の考えであることを明示的に示す。

### 2 留意事項

- (1) 解釈の中に解釈者自身の欲求や人格を反映させないように注意する。

対策

- ① テーマの繰り返しがある場合に特徴として取り上げる。
- ② ある特徴への意味付けを，3つ以上考えて，他の特徴と比べ合わせる。  
 (例) #2「………天候が悪いと作物が育たない。1年中，日照りが続かず雨とか多少降ってほしい」

1) 「日照り」→外界への不毛性，情緒の枯渇

2) 恵まれない状況を生じさせる要因の外在化

3) 「うね」に注目なら，病的サインである可能性を考慮すべきである。

- (2) 絵の中にある多義性の少ない刺激への言及には，被検者の人格特徴や問題の反映はない。

・絵にある明白な（多義性の少ない）刺激への反応の意味付けは弱くする。

(例) #1「少年は，いままでバイオリンの練習をしていたのですが，……」→×音楽に関心

・絵にないのに導入された人物や事柄には，強い意味付けをする。

・投映部分と非投映部分の識別が重要

Murstein (1963) による投映の分類

#### a) 古典的（精神分析的）投映

自分にとって脅威である自己の属性を無意識的に外部にあるものとする。

#### b) 帰属的投映

自分が考えるように相手も考えるだろうとする。質問紙法の face validity と同じである。

#### c) 自閉的投映

被検者の欲求に一致するように，投映される人物が特徴付けられる。

#### d) 合理化的投映

言い訳。無意識的でない。

- 3 物語に現れたテーマが，被検者の現実生活におけるテーマそのものであることもあれば，現実には，それとは逆である場合もあることに注意。例えば，情緒的に安定している子供のほうが，そうでない子供よりも，攻撃的テーマや葛藤が現れるとの研究もある。

## 各図版の特徴

全ての図版について言及することは紙幅の関係上できないので，以下に主要な図版について記載する。なお，重要と考えた図版は，説明文だけで付表にはないものも含まれている。内容面では，主に，Henry (1956)，安香 (1990)，坪内 (1984) を参考とした。以下別紙2では，これらをさす場合は，論文の公刊年は省略する。

### # 1

#### 1 反応領域

D = 少年，バイオリン，両者の関係。

なお，少年という言葉はなくても，「……バイオリンを前にして悩んでいる。バイオリンの練習をして……」など，独白調で物語が作られている場合も，少年を認知しているとみなしてよい。/d = 導入人物（図版には描かれていないが，物語には登場する人物のこと：#1では，親，親族，音楽教師，友人，コンサートでの聴衆が多い）。この図版への物語では，導入人物が登場するほうが通常的であり（準D），それがいない場合は，被検者が人間関係においてなんらかの問題を抱えている可能性がある。

/Dd = バイオリンの下にある物で，譜面，テーブル，布などがある。少年の表情や眼，バイオリンの弓，背景の暗さなどへの言及がある場合は解釈に注意を要する。TAT 反応における認知面の性質には，Henry も述べているように，ロールシャッハ・テストと共通する点がかなりあり，#1の物語の中で背景の暗さに言及する場合（例えば「……考え込んでいるうちに夕方になり部屋の中も暗くなってきた……」など），被検者における抑うつ感情や悲観的気分の存在を考えてよいことが多い。

#### 2 着眼点

(1) 衝動（遊びたい）と統制（バイオリンの練習をしなければならぬ）との葛藤を，どのように処理しているか（例：途中で練習をやめて，遊びに行ってしまう→衝動が統制できない，最後までがんばって練習する→衝動が統制できる）。

ただし，筆者の経験では，大学生のサンプルでは，遊びたい衝動が認められないことも多い。



(2) 達成動機の強さ (例: 世界一のバイオリニストになる→達成欲求は強い, やっと弾けるようになる→達成欲求は弱い)

(3) 導入人物に対する少年の態度 (→自分を社会が要請する課題に動機づける人物への態度を反映している)

(例: 嫌な課題を押し付けられている→社会的要請 (あるいは要請する人, 多くは親) への嫌悪, 弾き方を教えてくれて楽しく練習する→社会的要請 (あるいは要請する人, 多くは親) への肯定的な感情)

### 3 通常的な筋

(1) 親の支配と少年の達成あるいは反抗

(2) 名声への願望 (すぐれたバイオリニストになってみんなに賞讃されたい)

## # 2

### 1 反応領域

D = 若い女性, 年とった女性, 男性 / d = 3人の関係, 田舎あるいは農場, 若い女性が持っている本 (学生, 勉強といった言及があれば, 認知しているとみなす), 馬 / Dd = 岩, 建物, 収穫, 婦人が木に寄りかかっている, (男性が働いている) などを, Henry は挙げています。その他には, 婦人の妊娠, 後方の小屋, 畑の畝, 服の細部, 男性の筋肉, 湖, 後方に小さく見える男と馬, 前景と後景との分離 (前景の女性が, 後景とは, まったく別の場所や次元にいること)。筆者は, 妊娠への言及は, 絵を家族のほのぼのした場面としてみるのではなく, 男女の性的な場面としてみる場合に生じやすいと考えている。

### 2 着眼点

(1) 人間関係がどのように設定されるか (設定されないか)。

#1は描かれている人間が1人であるのに対して, #2では, 3人 (正確には4人) の人物が描かれているので, 対人関係に問題を抱えている人は, このカードで問題が出やすい。Dの3人が, お互いに自然な関係として物語が作られているかどうかを検討することが必要である。人間関係の種類としては, 通常は (後に述べるような対立はあるとしても基本的には), 暖かな親子関係が描かれることが多い。この場合は, 被検者の家族イメージも, 受容的で暖かなものであると考えられる。一方, 左側の女性が他の2人の間の娘という設定や, 異性関係 (三角関係), 主従関係 (右側の女性が男を酷使している) などが語られることもある。これらの場合は, 被検者の対人関係の問題を検討すべきである。

Henry は, 人物がばらばらに次のように叙述されることがあると述べている。例えば, 3人の向きがばらばらであることにこだわって, 例えば「この人たちの気持ちはばらばらで, みんな違ったことを考えているのです」というような反応となることがある。また極端な場合

は, 3人の人物には全く (あるいはなかなか) 言及せず, 後景の空や湖についての叙述が長々とされる場合がある。3人のどれかを省略した場合, 右側の女性は妊娠しているように見えるし, 畑で働いている男性は上半身が裸で筋骨隆々としているように見える。

(2) 新・旧の対立が描かれているか

前景の若い女性と後景の2人の人物を含む農村風景は, 前者が新しい世界 (娘の勉学志向や都会へ出たい思い (つまり, 自立や変化)) を, 後者が古い世界 (家族や農村) を象徴しており, それが両者の対立や調和という展開に結び付きやすい。したがって, 解釈上は, これらをどのように処理したかが重要である。(例: 娘は都会に勉強をしに行きたいと思って勉強し, 母親や兄は, それに反対している→自立の葛藤, 娘は都会の学校に通学しており, 家計は兄が支えている。母親は, 娘を迎えに来たついでに兄の働く様子をながめている→自立の成功と家族の支え)。

(3) 多くの複雑な細部をまとまった全体として統合しているかどうか。

空や湖や畑のうね, 道路の亀裂などへのこだわりがある場合は, 現実対処の弱さを検討すべきである。細部へのこだわりが物語のバランスを悪くするようであれば, 日常生活においても, 同様の問題が生じている可能性がある。背景には, 不安の高さや強迫的な傾向の存在を検討してもよい。

上に述べた3つの着眼点は, 相互に関連している。これらは, 2つのプロセスに分けてみると理解しやすい。第一は, 絵の中に, 2つの異なる価値観を見いだしているか否かである。都会対農村, 勉強対労働などである。このような見方ができるためには, 被検者が, 暖かな家庭のイメージを有していることや, 強い性的なとらわれがないことなどが求められる。

第二は, 前景の女性と後景を統合して物語が作られているかである。統合されている場合は, 青年期の被検者では, 多かれ少なかれ自立の問題と関連するものとなる。後景の価値観が前景を (寂しさや悲しさを有していたとしても) 許容していれば, それは被検者の自立を許容する (あるいは促進する) ものと考えられるし, 拒否的あるいは自立やそれに関することに全く言及がない場合は, 自立に対して許容的でない (と被検者は感じている) ことを示唆する。

前景と後景が統合されていない例としては, (1)の人間関係や(3)の絵の複雑さなどから, 後景を絵とみなし, 娘が展覧会に絵を観に来ているというような物語がある。前者は, 被検者に離人感が疑われ, 後者は知的な統合力の弱さが疑われる。

### 3 通常的な筋

(1) 娘の勉学志向 (達成) あるいは都会へ出たい (自立,

変化) 思いと親の支持あるいは反対

(2) 農村的・伝統的なものと都会的・進歩的なものとの対立と調和

### # 3

#### 1 反応領域

D = うずくまっている人物(ふつうは若者と見られる。性別は様々), 否定的状況の説明 /d = 床の上の物体(ふつうはピストルのような武器と見られるが, 鍵束などとされることがある), ソファやベンチ /Dd = とくになし

#### 2 着眼点

(1) 否定的状況をどう構成するか。

否定的状況の構成に関しては, ①他からの攻撃や身近な人物の喪失などの外的な否定的圧力を設定する場合と, ②自身の罪悪感や挫折感あるいは自己の身体的不調といった内的な否定的圧力を設定する場合の, 二通りに分かれる。自己イメージや自己の身近な周囲についての認知が表現されることが多い。例えば, 「主人公が病気で苦しんでいる」といった反応で, 強い自己不全感がうかがわれることがある。

(2) 床の上の物体(ピストル)をどう処理しているか。

3つの仮説がある。①Henry: 被検者の三分の一から四分の一ぐらいが人物とピストルの関係を述べることから, ピストルを無視したりそれに特別な関心を示したりする場合には, 性関心の象徴的叙述と考えられる。②Bellack (1954): ピストルを無視する場合は, 潜在的攻撃性が想定される。③安香(1990): 床の上の物体への言及は重要でない。もちろん, ①~③のいずれも, 他の物語の特徴との関連で考えるべきである。

(3) 性別の設定をどうしているか。

2つの仮説がある。①男性の被検者がこの人物を女性と見た場合, 性同一性ないしは自我機能の問題性を推論できる。②Henry, 安香: 男女いずれにもとらえられるので, 特別な意味付けはできない。安香は, 女性の被検者にもこの図版を用いるほうがよいと述べている。

#### 3 通常的な筋

誰かに攻撃されている, あるいは, 過去の失敗に罪悪感を抱いている。

### # 4

#### 1 反応領域

D = 男, 女, この2人の姿勢についての説明 /d = 後景の第二の女(実際の人物, モデル, ポスター, ピンナップなど見られる)。/Dd = とくになし。

#### 2 着眼点

(1) 異性関係をどのように設定するか。

男性が何かしようとするのを女性が引き止めているなど男女間の緊張した様子と見られることが多い。男性の

行為の内容によって次の2つに分かれる。①男性の行為が, 女性に関係したこと(女性から離れようとするなど)になる。→被検者の異性関係へのイメージがうかがえる。この図版は, 異性関係をみる他の図版(#10, #13MF)との関連を見る必要がある。この図版が男女の緊張感のある関係であるのに対して, #10は情愛的な関係を, #13MFは性的な関係を検出しやすい。②冒険とかけんかのようなものとなる。→男性の尋常でない様子に関心が向いている(目などへのとらわれがないか注意すること)。

(2) 人物の目や異様な様子への言及があるか。

目や目線について言及しているようであれば, 他の図版の反応を参考として, 不安や対人恐怖などを検討する必要がある。

#### 3 通常的な筋

(1) 女性が男性をあるいは男性の行動を止めている。

### # 5

#### 1 反応領域

D = 女性, 部屋の中をのぞいている(あるいは入ろうとしている)ことの説明, 絵には描かれていない部屋の右側への言及。/d = ドア, 導入人物(部屋の中の物, 部屋の中に誰かがいるというように人物が導入されることが多い)。/Dd = 本棚, 花瓶, テーブル, ランプ

#### 2 着眼点

(1) 絵には描かれていない右側の室内に言及するか, どのように言及するか→自分の性的好奇心を親に知られることへの不安がないか。

「絵の右側に言及」については, 次の2つの視点から解釈する必要がある。①多義性の高さ: 絵には描かれていない多義性の高い部分に言及するためには, そこになんらかの情景を自分でまず想像しなければならない。そのために, 被検者の内面を強く反映したものが語られると考えられる。②性的な自立: ドアを開けた女性が, 絵には描かれていない右側に見たものは, 象徴的には, 性的な秘密(マスターベーションをしているところ, 性交をしているところなど)と考えたほうがよい場合が少なくない。青年期における自立は, 親の知らない秘密を持つことから始まり, 多くの場合, その秘密とは, 性に関わることである。したがって, 右側に想定することは, 母親(あるいは親や家族)からの自立に関連することと考えてもよい。

なお, 母親が子供の様子を見にきたら, 子供は一生懸命に勉強していたという物語であったとすれば, 母親(あるいは家族)からの課題・要請を素直に受け止めて, それに応えようとするという状況が認められ, 自立のテーマは認められない。この場合, 自立ができていないと考えられるのか, 自立はまだ発達上の課題となっていないと見

るのか、あるいは既に自立を遂げているとみるのかは、他の反応を見なければ分からない。

(2) 母親像、母親像が禁止的、監督的か。あるいは養育的かなど。

絵にある女性は、母親に見られることが多いので、被検者の母親への態度や感情が表出されている場合が多い。例えば、安香は、「子供が勉強していたら、お母さんが『御飯ですよ』と知らせに来たので、階下へ食事に降りていった」というような物語が、しばしば語られる。このような例では、食事という口唇欲求が表出されており、被検者の心理的未成熟さないしは幼児性ととともに、母親への依存を想定できる、と述べている。一方、「いつけどおり子供が勉強をしているかどうかを見に来た」という物語であれば、被検者が、監督的な母親像を抱いていることが示唆される。

### 3 通常的な筋

- (1) この女性は、誰かが部屋にいるので驚いている。
- (2) 物音が聞こえたので、この女性が調べに来た。

## # 6 BM

### 1 反応領域

D = 若い男性、年とった女性 /d = 親子関係 (準 D) (坪内 (1984) も参照のこと) /Dd = 帽子、窓、暗さ、カーテン、衣服

### 2 着眼点

(1) 子供の母親像への態度がどのように表現されているか。→息子の独立ないしは母親からの分離の有無を検討する。

母親と息子という設定にされることが多く、しかも、息子は母親に別れを告げると言う場面が多いので、母親と息子の関係の結末から、この男性がどの程度独立心を人格の中に培っているかを判断できることが多い。例えば、結婚することを母親に伝えると、母親に反対されて結局結婚をあきらめると言う物語からは、被検者に対する母親の支配や束縛が強く、自立を妨げるほどである(あるいは、妨げていると被検者が受け止めている)ということが分かることがある。一方、母親は寂しさを感じながらも、被検者の結婚を祝福し、送り出すと言う物語では、母親からの心理的な自立がなされていることが推測される。

なお、もともと男性の図版であるだけに、女性については、上記仮説が当てはまらない場合があることには注意を要する。

(2) 母親像の影響力ないしは支配力の強さがどの程度強いのか。

(1)と関連して、青年期の被検者の場合は、しばしば自立を妨げる方向での母親の影響力や支配力が物語に現れる。例えば、母親の支配力が強大であるために、別れを

告げる相手を母親に設定できない場合などがある。多くの場合、母親像は、敵対的・拒否的に描かれたとしても、同時に庇護的・養育的であることが多く、そうであるからこそ被検者の自立を妨げると言う設定になることが多い。

(3) 母と息子という設定にならない場合

準 D の「親子関係」が認められない場合であるので、認知面でも標準的な反応とは言えない。こうした場合は、どのような状況設定がされているかに注目することが必要である。例えば、男の主人と召使といった設定では、人物の上下関係にとらわれて、母息子にならなかったのかもしれないし、男女が外をみているとあって両者の関係を特定しなかった場合には、2人の目線にこだわった結果かもしれない。

### 3 通常的な筋

- (1) 母親像である女性に別れを告げる。
- (2) 悲しいニュースを伝えている息子像としての男性

## # 7 BM

### 1 反応領域

D = 若い男性、年長の男性 /d = 上下関係 /Dd = 特になし

### 2 着眼点

(1) 上下の対人関係が設定されているか。

被検者の権威者や社会的な要請に対する態度、すなわち、権威像がどの程度内面化されているかを、2人の人物の物語の結末から知ることができる。例えば、若い男性は、年長の男性の忠告を聞き流しているだけとした場合は、権威像の内面化はなされていないと考えられる。忠告を自分自身の中に取り入れようとしているのか、あるいは、敵意を持って拒否しているのかなどによって、被検者の権威への構えを伺うことができる。

### 3 通常的な筋

(1) 父と息子、上司と部下多くは、年長の男性が若者に忠告している場面

## # 8 BM

### 1 反応領域

D = 前景の少年、後景の場面 (夢想あるいはイメージとされたり、実際の情景とされたりもする。外科手術のような治療場面とされたり、傷害の場面とされたりもする)、前景と後景がなぜこのような異次元にあるのかの説明 /d = ライフル、外科手術場面、医者、患者、医者の手にあるナイフ /Dd = 窓、本棚、さし込んでいるような光の帯、左上部にある包帯を巻いたような物、前景の少年の表情など (安香は、かなり多くの細部が、特異な認知の部分ないしは細部固執を起こさせやすい部分になると指摘している)。



## 2 着眼点

(1) 攻撃性の方向等とその処理がどのようになされているか。

誰が被害を受けたのか、どうして被害が生じたのか(加害者の故意か、過失あるいは偶発的なものかなど)に着目することが必要である。被害者が誰かということは、被検者の攻撃性の方向を示すし、故意か否かによって、攻撃性が直接的なものか、間接的なものかを知ることができる。

(2) 複雑な刺激を統合できているか。

#2よりもさらに雑然としていて統合の難しい図版である。前景の少年、後景の手術場面、ライフルをどのように統合して物語を作るかで、知的な側面、あるいはその発揮を妨げている情緒的な問題の有無を検討する。

前景と後景の設定については次の2つがある。①

Henry: 前景を現実、後景を非現実とする場合。敵意や攻撃よりは、被検者の現実指向性、野心や将来計画のスキルが反映される。②安香: 前景も光景も現実とする場合(例えば、「少年が手術場面を見ている」)。前景と後景をそれぞれ別次元での事柄と設定しなかったからといって、被検者の現実指向性や現実吟味に問題があるというとはえ方はできない。なお、#2では、前景と後景をとともに現実場面のものとして物語を作るのが、通常であったが、この図版の場合は、後景を前景の少年の夢想とする物語もさほど珍しくはないので、このような内容であっても、被検者の現実指向性や現実吟味に問題があるとは解釈できない。

(3) 細部固執等がないか。

Ddで述べた細部固執により、去勢不安、鋭い自己不全感、同性愛感情などが読み取れることがある。

## 3 通常的な筋

- (1) 少年が誤って誰かをライフルで撃った。
- (2) ライフルの暴発といった事故で誰かがけがをした。
- (3) 弾を取り出す手術がなされるのを少年が見ている。
- (4) 後景を犯罪的な傷害場面と見て、悪者がだれかを殺そうとしている。

## #10

## 1 反応領域

D = 男性, 女性, 異性関係 /d = 手, ほのぼのとした情景 /Dd = 暗さ, 男性の口元の影, 目, 髪

## 2 着眼点

(1) ほのぼのとした異性愛が描かれているか。

TATでは、異性愛を「肯定的感情 positive affect」の指標とみなすことが多い。したがって、ほのぼのとした異性愛がこの図版で語られる場合は、異性との関係だけに限らず、被検者の人間全般に対する情愛そのものが豊かであることを示唆している。全31枚の図版中、異性愛の

主題が語られやすいのは、#4, #6GF, #10, #13MFである。これらのうちでもこの#10は、否定的状況設定であったとしても、最も情愛的(affective)な雰囲気でも異性愛が語られることが多い図版である。したがってこの図版で「ほのぼの」とした異性愛が語られなかったとしたら、被検者における相当に強い性禁圧や性的先入見を考えるとともに、それ以上に基本的な情操面での大きな問題性を疑うべきである(安香)。

## 3 通常的な筋

- (1) 相手へのいたわり
- (2) 別離
- (3) 再会

## #11

## 1 反応領域

D = 自然の風景, 路上の動物, 岩から突き出ている動物(ドラゴン), (人間のいない絵) /d = 岩や谷, 橋の上で動物のような物の前を逃げていくようにしている人間 /Dd = ドラゴンの上にある小さいくつもの点, 左上の森のように見える暗い部分, 岩の裂け目, 右下の谷の暗さ

## 2 着眼点

(1) 深い層の攻撃性がどのように表出されているか。

全体として多義性の高いこの図版の特質から、未知の統制されない衝動がどう扱われるか、人物の導入や擬人化がどうなされるかが、この図版についての最も重要な着眼点である。次の2つの物語となることが多い。第一は、幽玄・静寂の地ともいべき深山幽谷と見る肯定的な受け止め方であり、dの人物を物語に取り入れることがある。第二は、2匹の動物間の争いを設定する攻撃的な話である。この場合は、動物が擬人化されることがほとんどで、この図版で攻撃性や敵意あるいは外界を脅威的と見る感情が表出された場合は、#10までの前半シリーズよりも深い層の攻撃性等が存在していると考えられることができる。なお、1番目の深山幽谷という見方も少なくないので、2匹の動物が対立していないからといって、即攻撃性の抑圧などという解釈にはならない。

(2) 複雑な刺激が適切に処理されているか。

前半シリーズの#2や#8BMが人間関係や攻撃性の処理、前景と後景の統合といった難しさを有するのに対して、この図版は原初的な攻撃性の処理と複雑な刺激配置について統合的構成を求められ、知的な能力、賦活された感情(例えば攻撃性)と現実対処能力などが検討の対象となる。後半シリーズでは#19と並んで物語構成が難しい図版である。

(3) その他

安香は、①危機的な状況から逃れたいという救助欲求や養育圧力(他からの援助)、②“暗さ”に象徴される暗黒

の世界への没落といった諦観的無力感や宿命観, ③世界が崩壊するというような運命的悲観気分, ④ドラゴン様の物に象徴される性的問題性が現れることがあると述べている。

### 3 通常的な筋

- (1) 幽玄・静寂の地ともいうべき深山幽谷と見る肯定的な受け止め方
- (2) 2匹の動物間の争いを設定する攻撃的な統覚

## #13MF

### 1 反応領域

D = うなだれている男性, 女性, 2人が一緒にいることの説明 /d = 本, ベッド, 女性が裸であること。/Dd = 特になし。

### 2 着眼点

- (1) 身体的な性に関する被検者の態度がどのように表出されているか。

性的な内容の潜在的刺激特質を有する図版の中では、直接的に肉体関係を連想させる図版である。男性のうなだれているような姿勢や絵全体のなんとなく暗い雰囲気から、性（とくに性行為）についての否定的考え方や感情ないし禁止や偏見を映し出しやすい。物語りの仕方という形式面での崩れが起こるかどうかが、起こる場合どのような性質の崩れとなるかによって、上記を判断することとなる。

ただし、ミドルクラスの人々の反応では、前述のような刺激特質から否定的な形での性行動（不倫、売春、男女間の葛藤など）の物語となるのが普通なのであるから（Henry）、そのような内容からすぐに被検者にそうした傾向があると考えすることはできない。被検者における性的問題性や性についての過度な禁圧を想定しうるのは、例えば、①暴力とか攻撃をからめた性行動のように設定する、②この場面を性的なものとは全くせず、女が病気であるとか死んでいるとする、場合などである。

### 3 通常的な筋

- (1) 罪を伴う禁じられた性関係
- (2) 女が死んで男（しばしば夫とされる）が後悔や悲しみの念を表している。

## #18BM

### 1 反応領域

D = 男, 手（背後からの）、外界が援助的か脅威か /d = 顔の表情, 暗さ, 乱れた服装 /Dd = 特になし。

### 2 着眼点

- (1) 外界への態度他人からの攻撃されてるのか、守られているのか。

男性の肩や腕に手が添えられているというこの情景については、①誰かに襲われている、②誰かに支えられ助

けられているという2つの見方がある。前者は自分の周囲を脅威的と、後者は援助的とみている指標である。背後からの手が3つあることに気づいて背後の人物を複数と設定するのは、知的に敏活な人に多い（安香）。

### 3 通常的な筋

- (1) 誰かに襲われている→自分の周囲を脅威的とみている。
- (2) 誰かに支えられ助けられている→自分の周囲を援助的とみている。

## #19

### 1 反応領域

D = 雪に覆われた小屋・船 /d = 水・波・雪, 窓の中のもの, フクロウ /Dd = 雲, 雪の窓, 煙突, 暗さ, 小屋の後ろの黒い物。

### 2 着眼点

- (1) 絵の新奇さ、非日常性をどう処理しているか。

被検者が、新しい課題や非日常性に対峙したときの処理能力を吟味できる図版である。それは、この図版が、①多義性が高く、一種の抽象画のようで非現実的であり、②多くの細部があるために、物語の統合的な構成がかなり難しいためである。

この図版には、以下の2つの見方がある。①全体を雪景色と見て、雪に覆われた小屋、そして窓から見える小屋の内部は暖かく楽しげであるとする見方と、②全体を荒れ狂う海あるいは氾濫する川とみて、小屋は漂流する船あるいは河岸に立つ樺杭か何かと見る、いわば“水の景色”という見方である。安香は、前者は、安定し肯定的感情を持つ適応した人格を、後者は、精神障害から不適応までの広範囲にわたる、不安定で不安や不全感の強い、自己の統制困難な衝動に押し流され、自他についての信頼感を持つことができない人格を、それぞれ暗示すると述べている。Henryは、小屋（あるいはボート）を被検者の自己と考え、外界の悪しき力にどう拮抗しているかが、この図版に対する物語の主題であるとしている。

### 3 通常的な筋

- (1) 全体を雪景色と見て、雪に覆われた小屋、そして窓から見える小屋の内部は暖かく楽しげである。  
→ 安定し肯定的感情を持つ適応した人
- (2) 全体を荒れ狂う海あるいははらんとする河と見て、小屋は漂流する船あるいは河岸に立つ樺杭か何かと見る、いわば“水の景色”。  
→ 精神障害から不適応までの広範囲にわたる、不安定で不安や不全感の強い、自己の統制困難な衝動に押し流され、自他についての信頼感を持つことができない人  
その他、時々見られる筋には、次のようなものがある。
- (3) 全体を「抽象画」としてしまう短い物語  
→ “逃げ”の反応、あるいは知能の低さ



- (4) 小屋の火事, 黒煙と炎が立ちのぼっている  
→ 強い衝動性と不安の存在
- (5) お化けあるいは怪物がにらんでいる  
→ 外界を脅威的に感じる猜疑的な不安

## #20

### 1 反応領域

D = 人物 (たいていは男性と見られる), 暗さ (夜としたものも含む) /d = 光りの斑点, 灯, 柱 /Dd = 男の帽子, ポケット・手, 光の筋

### 2 着眼点

- (1) 孤独感などがどう表現されているか。

最も多い見方は、「夜, 街灯の下で, 帽子をかぶりポケットに手を突っ込んだ男がもの思いにふけている」というものである。語られる内容によって, 孤独感, 挫折感, 悲哀感, 自殺念慮, あるいは仲間や家族への思慕などが表明される。最後のカードとして, これまで語られた物語のまとめとしての物語, あるいは自分の来し方行く末が物語に託して語られることが多い。

- (2) 自己イメージがどのように表出されているか。

語り手の自己洞察や自己イメージが, 独白的に語られる。表面的な物語に終始しているような場合は, 被検者の内省力の乏しさや, 自分を見つめようとする構えの乏しさを示唆することが多い。

- (2) 病理性の指標の有無

次のような反応が現れた場合は, 以下を検討する必要がある。①知覚歪曲:「海の中で, なん隻かの潜水艦が浮かんでいる (人物や街灯についての知覚歪曲)」→漠然とした不安や脅威感。「宇宙で, 大爆発が起こったところ (同様の歪曲)」→強い衝動性。② Dd への特異な言及: 通常の設定であっても, 光のすじやしみに言及して「電線がキラキラ光っている」とか「向こうにミカン畑が見える」など→不安あるいは何らかの病理性の指標。

### 3 通常的な筋

夜, 街灯の下で, 帽子をかぶりポケットに手を突っ込んだ男がもの思いにふけている。

以上で, 分析・解釈マニュアルの本文は終わりです。TAT 検査の初学者の皆さんが, 自己流でない実施方法や分析・解釈方法を身に付け, さらに TAT 検査を少しでも好きになり, 我々と一緒に育てていきたいと思って頂ければ幸いです。

## 5 引用文献

- 安香宏 (1990). TAT 土居健郎・笠原嘉・宮本忠雄・木村敏 (編) 異常心理学講座第8巻テストと診断 みすず書房 pp.121-169.
- 安香宏 (1992a). 人格力動の解釈と投映技法安香宏・大

塚義孝・村瀬孝雄 (編) 臨床心理学体系第6巻人格の理解② 金子書房 pp.2-23.

安香宏 (1992b). TAT の分析・解釈技法をめぐって

安香宏・大塚義孝・村瀬孝雄 (編) 臨床心理学体系第6巻人格の理解② 金子書房 pp.54-88.

安香宏 (1997). TAT 実施の流れに沿った各カードのポイント 安香宏・藤田宗和 (編) 臨床事例から学ぶ TAT 解釈の実際 新曜社 pp.15-30.

安香宏・坪内順子 (1968). TAT の分析と解釈基準の検討——刺激認知と物語構成の特徴からみた——臨床心理学研究, 7, pp.1-14.

Bellack, L. (1954). The TAT and CAT in Clinical Use. Grune & Stratton.

Henry, W.E. (1956). The analysis of fantasy. The thematic apperception technique in the study of personality. John Wiley & Sons. Inc.

川越友美子・安香宏・藤田宗和 (2001). 認知的側面からみた TAT の枠組みの検討 昭和女子大学生生活心理研究所紀要4, pp.24-40.

藤田宗和・田中奈緒子・木村あやの (2016). TAT の物語産出時の認知・思考プロセスと物語の標準テーマの研究: TAT の物語の分析規準の作成 昭和女子大学生生活心理研究所紀要18, pp.45-53.

本村悠太・遊間義一 (2008). 大学生と非行少年における TAT 反応の出現率 埼玉工業大学人間社会学部紀要7, pp.1-19.

Murstein, B. I. (1963). Theory and research in projective techniques (emphasizing the TAT). John Wiley & Sons.

Stein, M.I. (1955). The Thematic Apperception Test. Addison-Wesley.

坪内順子 (1984). TAT アナリシス—生きた人格診断 垣内出版.

遊間義一・橋本瑞希 (2019). 大学生の TAT における顕在的・潜在的刺激特質と潜在的刺激特質の関連 包括システムによる日本ロールシャッパ学会誌23, pp.32-45.

Weisskopf, E.A. (1950). A transcendence index as a proposed measure in the TAT. The Journal of Psychology: Interdisciplinary and Applied, 29, pp.379-390. <https://doi.org/10.1080/00223980.1950.9916039>

付録 表1-1. 大学生・男女別カードごとのD・d・Ddの出現率  
 ※カード1, 2, 5, 6BM; 本村・遊間 (2008) の一部を引用

カード1のD・d・Ddの出現率				カード2のD・d・Ddの出現率				カード5のD・d・Ddの出現率			
#1	認知の型	大学生		#2	認知の型	大学生		#5	認知の型	大学生	
		男 (N=77)	女 (N=56)			男 (N=77)	女 (N=56)			男 (N=77)	女 (N=56)
少年	認知	98.7	100.0	若い女性	認知	97.4	100.0	女性	認知	100.0	100.0
	省略	2.6	0.0		省略	0.0	0.0		省略	0.0	0.0
	歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0
	失敗又は拒否	0.0	0.0		失敗又は拒否	2.6	0.0		失敗又は拒否	0.0	0.0
D バイオリン	認知	74.0	98.2	D 年取った女性	認知	64.9	76.8	D 部屋を覗こうとしている	認知	87.0	78.6
	省略	26.0	1.8		省略	32.5	23.2		省略	13.0	21.4
	歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0
	失敗又は拒否	0.0	0.0		失敗又は拒否	2.6	0.0		失敗又は拒否	0.0	0.0
両者の関係 (a)(b)	認知	74.0	69.6	男性	認知	76.6	78.6	D 部屋の右側への言及	認知	75.3	73.2
	省略	26.0	30.4		省略	20.8	21.4		省略	24.7	26.8
	歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0
	失敗又は拒否	0.0	0.0		失敗又は拒否	2.6	0.0		失敗又は拒否	0.0	0.0
d 導入人物(b)	認知	53.2	67.9	馬	認知	26.0	23.2	d ドア(b)	認知	31.2	25.0
	省略	46.8	32.1		省略	71.4	76.8		省略	68.8	75.0
	歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0
	失敗又は拒否	0.0	0.0		失敗又は拒否	2.6	0.0		失敗又は拒否	0.0	0.0
弓	認知	1.3	0.0	3人の関係(b)	認知	51.9	53.6	本棚	認知	1.3	0.0
	省略	98.7	100.0		省略	45.5	46.4		省略	98.7	100.0
	歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0
	失敗又は拒否	0.0	0.0		失敗又は拒否	2.6	0.0		失敗又は拒否	0.0	0.0
紙(譜面)	認知	5.2	7.1	d 田舎あるいは農場であること(b)	認知	61.0	69.6	Dd 花瓶	認知	7.8	7.1
	省略	94.8	92.9		省略	36.4	30.4		省略	92.2	92.6
	歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0
	失敗又は拒否	0.0	0.0		失敗又は拒否	2.6	0.0		失敗又は拒否	0.0	0.0
弦	認知	3.9	1.8	若い女性が持っている本(b)	認知	27.3	37.5	Dd テーブル	認知	2.6	5.4
	省略	96.1	98.2		省略	70.1	62.5		省略	97.4	94.6
	歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0
	失敗又は拒否	0.0	0.0		失敗又は拒否	2.6	0.0		失敗又は拒否	0.0	0.0
目	認知	1.3	0.0	岩	認知	0.0	0.0	ランプ	認知	7.8	3.6
	省略	98.7	100.0		省略	97.4	100.0		省略	92.2	96.4
	歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0
	失敗又は拒否	0.0	0.0		失敗又は拒否	2.6	0.0		失敗又は拒否	0.0	0.0
Dd 腕	認知	1.3	0.0	建物	認知	2.6	3.6	カード6BMのD・d・Ddの出現率			
	省略	98.7	100.0		省略	94.8	96.4	大学生			
	歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0	#6BM	認知の型	男 (N=76)	女 (N=56)
	失敗又は拒否	0.0	0.0		失敗又は拒否	2.6	0.0	D 若い男性	認知	100.0	98.2
耳	認知	0.0	0.0	收穫	認知	0.0	0.0		省略	0.0	1.8
	省略	100.0	100.0		省略	97.4	100.0		歪曲	0.0	0.0
	歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0		失敗又は拒否	0.0	0.0
	失敗又は拒否	0.0	0.0		失敗又は拒否	2.6	0.0	D 年取った女性	認知	97.4	100.0
髪	認知	0.0	0.0	婦人が木に寄りかかっている (b)	認知	9.1	14.3		省略	2.6	0.0
	省略	100.0	100.0		省略	88.3	85.7		省略	0.0	0.0
	歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0
	失敗又は拒否	0.0	0.0		失敗又は拒否	2.6	0.0	失敗又は拒否	0.0	0.0	
机	認知	1.3	0.0	男性が働いている (b)	認知	19.5	12.5	d 親子関係 (b)	認知	51.3	66.1
	省略	98.7	100.0		省略	77.9	87.5		省略	48.7	33.9
	歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0
	失敗又は拒否	0.0	0.0		失敗又は拒否	2.6	0.0		失敗又は拒否	0.0	0.0
暗さ	認知	0.0	3.6	婦人の妊娠	認知	14.3	5.4	帽子	認知	2.6	1.8
	省略	100.0	96.4		省略	83.1	94.6		省略	97.4	98.2
	歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0
	失敗又は拒否	0.0	0.0		失敗又は拒否	2.6	0.0		失敗又は拒否	0.0	0.0
Dd 畑の歌	認知	0.0	0.0	服の細部	認知	0.0	0.0	Dd 暗さ	認知	3.9	8.9
	省略	97.4	100.0		省略	97.4	100.0		省略	96.1	91.1
	歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0
	失敗又は拒否	2.6	0.0		失敗又は拒否	2.6	0.0		失敗又は拒否	0.0	0.0
男性の筋肉	認知	1.3	0.0	湖	認知	1.3	1.8	Dd カーテン	認知	1.3	1.8
	省略	96.1	100.0		省略	96.1	98.2		省略	98.7	98.2
	歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0
	失敗又は拒否	2.6	0.0		失敗又は拒否	2.6	0.0		失敗又は拒否	0.0	0.0
後方に見える男と馬	認知	1.3	0.0	前景と後景の分離	認知	3.9	1.8	衣服	認知	1.3	0.0
	省略	94.8	98.2		省略	94.8	98.2		省略	98.7	100.0
	歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0
	失敗又は拒否	2.6	0.0		失敗又は拒否	2.6	0.0		失敗又は拒否	0.0	0.0

注: 表中の数値は%である。  
 (a): 評定者間の一致率が80%未満  
 (b): 大学生における実施状況別の一致率が80%未満

付録 表 1-2. 大学生・男女別カードごとの D・d・Dd の出現率  
 ※カード7BM, 10, 13MF, 18BM, 19, 20; 本村・遊間 (2008) の一部を引用

カード7BMのD・dの出現率				カード13MFのD・dの出現率				カード19のD・d・Ddの出現率												
#7BM	認知の型	大学生		#13MF	認知の型	大学生		#19	認知の型	大学生										
		男 (N=77)	女 (N=56)			男 (N=77)	女 (N=55)			男 (N=77)	女 (N=56)									
D	若い男性	認知	100.0	98.2	うなだれて いる男性	認知	100.0	94.5	D	小屋・船	認知	70.5	75.0							
		省略	0.0	1.8		省略	0.0	1.8			省略	28.2	25.0							
		歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	3.6			歪曲	0.0	0.0							
		失敗又は拒否	0.0	0.0		失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	1.3	0.0							
d	年とった 男性	認知	98.7	100.0	D	女性	認知	92.2	100.0	d	水・波・雪	認知	36.4	60.7						
		省略	0.0	0.0			省略	3.9	0.0			省略	62.3	39.3						
		歪曲	1.3	0.0			歪曲	3.9	0.0			歪曲	0.0	0.0						
		失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	1.3	0.0						
Dd	上下関係(b)	認知	57.1	64.3	二人が このようにして 一緒にいる ことへの説明	認知	67.5	72.7	Dd	窓の中の もの	認知	14.3	30.4							
		省略	42.9	35.7		省略	32.5	27.3			省略	84.4	69.6							
		歪曲	0.0	0.0		歪曲	0.0	0.0			歪曲	0.0	0.0							
		失敗又は拒否	0.0	0.0		失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	1.3	0.0							
カード10のD・d・Ddの出現率				カード18BMのD・dの出現率				カード20のD・d・Ddの出現率												
#10	認知の型	大学生		#18BM	認知の型	大学生		#20	構成面のカテゴリ	大学生										
		男 (N=77)	女 (N=56)			男 (N=77)	女 (N=56)			男 (N=77)	女 (N=56)									
		D	男性			認知	100.0			96.4	D	手 (背後から)	認知	89.6	91.1	D	人物	認知	96.1	96.4
						省略	0.0			0.0			省略	0.0	0.0			省略	3.9	3.6
歪曲	0.0			3.6	歪曲	0.0	0.0	歪曲	0.0	0.0										
失敗又は拒否	0.0			0.0	失敗又は拒否	0.0	0.0	失敗又は拒否	0.0	0.0										
Dd	女性	認知	97.4	94.6	D	外界が 援助的か 脅威的か (a)(b)	認知	76.6	87.5	D	暗さ	認知	84.4	75.0						
		省略	0.0	0.0			省略	23.4	14.3			省略	15.6	25.0						
		歪曲	2.6	5.4			歪曲	0.0	0.0			歪曲	0.0	0.0						
		失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0						
Dd	異性関係	認知	75.3	83.9	D	顔の表情 (a)(b)	認知	27.3	33.9	D	暗さ (a)(b)	認知	48.1	44.6						
		省略	24.7	16.1			省略	72.7	66.1			省略	51.9	55.4						
		歪曲	0.0	0.0			歪曲	0.0	0.0			歪曲	0.0	0.0						
		失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0						
Dd	ほのぼのとした (ポジティブな) 情景(a)(b)	認知	31.2	41.1	D	暗さ (a)(b)	認知	32.1	8.9	D	灯(b)	認知	48.1	53.6						
		省略	68.8	58.9			省略	68.8	91.1			省略	51.9	46.4						
		歪曲	0.0	0.0			歪曲	0.0	0.0			歪曲	0.0	0.0						
		失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0						
Dd	手	認知	0.0	1.8	Dd	乱れた服装	認知	3.9	3.6	D	男性の帽子	認知	6.5	3.6						
		省略	100.0	98.2			省略	96.1	96.4			省略	93.5	96.4						
		歪曲	0.0	0.0			歪曲	0.0	0.0			歪曲	0.0	0.0						
		失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0						
Dd	暗さ	認知	2.6	7.1	Dd	ポケット・手	認知	16.9	10.7	D	光の筋	認知	9.1	5.4						
		省略	97.4	92.9			省略	83.1	89.3			省略	90.9	94.6						
		歪曲	0.0	0.0			歪曲	0.0	0.0			歪曲	0.0	0.0						
		失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0						
Dd	男性の口元の 影	認知	3.9	0.0	Dd	光の筋	認知	9.1	5.4	D	失敗又は拒否	認知	0.0	0.0						
		省略	96.1	100.0			省略	96.1	96.4			省略	0.0	0.0						
		歪曲	0.0	0.0			歪曲	0.0	0.0			歪曲	0.0	0.0						
		失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0						
Dd	目	認知	0.0	0.0	Dd	乱れた服装	認知	3.9	3.6	D	失敗又は拒否	認知	0.0	0.0						
		省略	100.0	100.0			省略	96.1	96.4			省略	0.0	0.0						
		歪曲	0.0	0.0			歪曲	0.0	0.0			歪曲	0.0	0.0						
		失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0						
Dd	髪	認知	0.0	0.0	Dd	乱れた服装	認知	3.9	3.6	D	失敗又は拒否	認知	0.0	0.0						
		省略	100.0	100.0			省略	96.1	96.4			省略	0.0	0.0						
		歪曲	0.0	0.0			歪曲	0.0	0.0			歪曲	0.0	0.0						
		失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0			失敗又は拒否	0.0	0.0						

注: 表中の数値は%である。  
 (a): 評定者間の一致率が80%未満  
 (b): 大学生における実施状況別の一致率が80%未満



